現場へ！

文豪めでた街 タワマン構想

再開発 変わる東京・石神井 1

石神井公園は東京23区の北西、練馬区にある。三宝寺池、石神井池という二つの池があり、そのまわりを7500本の木々が取り囲む。武蔵野の面影を残し、ここが東京とは思えないほどである。

そんな都会のオアシスの近くで今、再開発が始まろうとしている。西武鉄道石神井公園駅の南口西地区に高さ100㍍のタワーマンションを造る市街地再開発計画が持ち上がり、反対する住民が東京都と練馬区を相手取って再開発組合の設立認可差し止めの訴えを起こした。

原告の一人、元高校国語教師の中田嘉種(69)は「地域のなりたちからして、高層ビル群はふさわしくないのです」と言う。江戸時代から景勝地として知られ、昭和の初めの1930年には風致地区に指定された。大正時代に駅ができると、今で言うリゾート地のようなところになった。

■■■

太宰治は37年5月、若い文学青年や女学生と石神井公園で遊んだ。彼らは「青春五月党」と名乗り、ボートをこぎ、お弁当を食べた。太宰は大はしゃぎだった。「素晴らしい五月の太陽だった」。そう檀一雄は「小説太宰治」にこの時の様子を記している。檀こそ、五月党の中心人物だった。

檀は石神井公園に魅了され、直木賞を受賞した51年、公園の近くに越してきた。375坪の敷地に大きな木々がある風情のある屋敷だった。後に剣豪小説家として知られる芥川賞作家の五味康祐も当地に移った。周辺には武谷三男(科学者)、丸木位里(画家)ら学者や文化人が住み、やがて彼らは「石神井談話会」という文化団体を作り、映画の上映会や子供会を開いた。「戦後の開放的な空気のなか、10年ほど花開きました」。石神井公園ふるさと文化館分室の学芸員、山城千恵子(63)が解説してくれた。

分室は、かつての日本銀行の運動場のクラブハウスにある。日銀は2008年、石神井公園に隣接する4・7㌶の運動場を練馬区に譲渡する契約を結んだ。五味の2万点もの遺品は区に寄贈され、オーディオマニアだった彼の高級機器を用いたレコードコンサートが毎月、ここで催されている。人の背丈ほどあるタンノイのスピーカーから響く音は、意外にも優しく、窓の向こうの緑と調和する。

■■■

分室には檀の書斎が移築されてもいる。檀邸は17年、面する道路(補助132号線)拡幅のため取り壊され、屋敷内に11本あったマツの大木は1本を残して切られてしまった。建て替えた家の敷地は往時の3分の1ほどである。

道路拡幅計画は、焼け野原となった東京に幅員の広い道路を造ろうと戦災復興院が1947年に立てたものだった。それが70年後に動き出し、「檀坂」と呼ばれたこみちは跡形もなくなった。

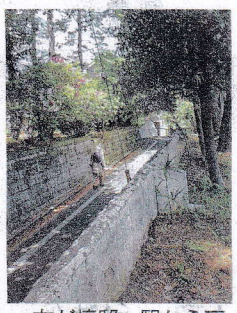
駅のそばにはタワマンがすでに2棟立つ。そこに新たな再開発計画が加わる。「練馬区は景観を生かした街づくりをしていません」。長女の俳優、檀ふみは憤懣やるかたない。生まれ育ったこの地は、駅を出たら高い建物はなく一面緑だった。それが今「駅の方は見たくないわ」と視線をそらす。

新たなタワマンができるのも、戦前の計画に由来する道路(補助232号線)が動き出すことが引き金となった。＝敬称略(大鹿靖明)

東西に細長い石神井公園。石神井川の中流域にあり、園内の三宝寺池は武蔵野三大湧水池のひとつだった

石神井公園ふるさと文化館分室にある五味康祐のオーディオ

文化館分室に一部が移築された檀一雄の書斎「奇放亭」



右が檀邸。駅から石神井公園を結ぶ風情のある道だった＝2010年、檀ふみ提供

檀ふみ＝檀ふみ事務所提供

朝日新聞夕刊に5回シリーズで 令和3年8月16日号に掲載されました。